法華寺旧境内出土の柱根と礎板

昨年と今年の春におこなわれた法華寺旧境内の調査では、数多くの柱根や礎板が出土しました（写真右頁）。出土した部材は、酸素や紫外線が遮断された地中でよく保存され、柱根は大きいもので直径約40㎝、長さ約130㎝におよびます。その柱根の下方には手斧（ちょうな）による丁寧な加工痕が観察でき（写真左頁上）、底面には加工時の墨付けがみられます（同下）。よく見ると、十字線の左端と加工位置が微妙にずれています。礎板には厚みが薄いものと厚いものとがありますが、ほぞ穴が見られるものもあり、何らかの部材を転用したものと考えられます。

（都城発掘調査部　芝 康次郎）

柱根にのこされた加工痕跡（上）と
加工時の墨付（右の赤外線写真）

今年の調査で見つかった掘立柱。
約130cm分が残存していた。